公開講演会記録

人として当たり前のこと

特定非営利活動法人 杉原千畝命のビザ理事長　杉原まどか

本日は国際善隣協会の皆さまにお招きいただき、大変ありがとうございます。私の祖父千畝（ちうね）について講演をさせていただきます。まず当法人オリジナル動画で杉原千畝についてご視聴いただき、そのあと講演に入ります。そして最後に助けられたユダヤ人のスライドもご覧いただき終了となります。

1．ビザの写真

まず最初にビザについて説明いたします。最初のビザは先ほど視聴した動画でインタビューに答えていただいたモゼールさんがお持ちのものでしたが、今は当法人に寄贈されたため私たちのところにございます。大変古いものですので皆さまにお見せするため、現在レプリカを制作中です。実物は半永久的に保存するため科学的処理を施しました。次のビザの持ち主が戦後祖父を見つけてくれたジェホシュア・ニシュリさんです。祖父の手記にもニシュリさんのお名前があります。

2．リトアニア人道の桜公園

こちらはリトアニアのネリス川にある人道の桜公園です。２００１年にこの石碑が早稲田大学の寄付で建立され、リトアニアの大統領と一緒に祖母幸子が落成式で桜の植樹をいたしました。それ以来多くの団体が日本から桜を持ち込み植樹し、現在は大きな桜並木の公園となりました。リトアニアは５月が桜の開花時期でこの季節は日本の春と同じです。この公園はリトアニアでは有名な公園となりました。

3．カウナスの日本領事館

現在はスギハラハウスと呼ばれ、ミュージアムとなっています。祖父が在リトアニア日本領事代理として赴任した場所です。１９３９年７月にプラハからリトアニアに家族で赴任しました。当初はポーランドのルヴフ、ドイツ語表記ではレンベルク、現在はウク

ニシュリさんのビザ

ライナ領のリヴォフに赴任する予定でしたが、当時ポーランドには不穏な気配が漂っていたため急遽リトアニアの首都カウナスに赴任しました。祖父の肩書が「領事代理」だったため正式な領事は誰かと、まれに質問を受けます。祖父は日本外務省から赴任の命を受けた際、東清鉄道の買収事業で活躍したためソ連から「ペルソナノングラータ」とされました。そのためソ連が警戒することを危惧した本省から目立たない肩書で行くようにと言われました。また偽名を使って行くようにとも言われましたが、自分は外交官である、スパイではないのだから本名で行くと話したそうです。ただし、表向きの肩書は領事代理として赴任しましたが、祖父が実質の領事でした。

リトアニア スギハラハウスにはNHKの特番の取材で訪れました。バルコニーに可愛い1匹の猫が座っていまして、訪れる観光客をいつも迎えてくれるそうです。ここでまさに祖父は命のビザを発給したのです。

1940年7月18日の早朝に門の前に大勢のユダヤ難民が集まりました。

4. 門の前のユダヤ避難民

この写真は祖母の妹の節子叔母が撮影したもので、今では世界的に有名な写真となっています。今回この写真をどこで撮影したのかとカメラマンが位置を調べたところ、バルコニーを出たところでカメラを構え目の前のユダヤ人を撮影したのだろうとのことです。祖父母がライカのカメラを使っていたとカメラマンに話したところ、ピントを合わせるのがかなり難しく、すぐにシャッターを押すとブレてしまうが、この写真は大変よく撮れている。それは恐らく喧騒の中でも落ち着いてカメラを構えて撮ったのだろうとのことでした。実はユダヤ避難民を撮影した写真はもう1枚あり、それがかなりブレていまして話を聞いて納得しました。ブレた写真は祖母が撮影したもので、祖母はカメラの扱いに詳しくなく急いでシャッターを切ったのでした。そのため写真のピントがずれたのだとカメラマンの説明で判明しました。

門の前のユダヤ避難民

5. サバイバーご遺族との出会い

半地下の執務室で撮影をしていたとき、観光客のご夫妻に出会いました。聞けばイスラエルから初めてリトアニアに旅行に来たご夫妻でシモン・アルジさんというお名前で、アルジさんの叔母様が杉原ビザ受給者でした。杉原リストの１４１０番にそのお名前があります。杉原リストは原本が外務省外交史料館に保管され、史料館入り口に精巧なレプリカが展示されています。どなたでも見学できますのでお時間があるときにぜひ訪問してください。外交史料館は外務省の公電や資料を保存しているところですべての関係資料を保存しています。その中で祖父が作ったサバイバーのリストを史料館の入り口の目立つところに置いてくださっていることに家族で感謝しています。また階段のすぐそばに顕彰碑も置いてくださっています。

6．リンゴの木

スギハラハウスの裏庭に行くと祖母幸子が当時植えたリンゴの木があります。生前祖母が私に「領事館の裏庭にリンゴの木を植えたけれど、あれはどうしたかしら」と話していました。裏庭には黄色と青色の実をつけるリンゴの古木があり、館長に聞くと確かに50年以上は経っているとのことで、１本は相当浸食されているため数年以内に伐採する予定と話していました。種類の違うリンゴの木が植えられていてこれは明らかに祖母が植えたものと確信しました。家の庭でも必ず違う種類の苗を植える人でしたので「やはり」と思いました。私が育った祖父母の家には２本のグミの木があり、大きさの違う実が毎年たわわに成っていたのをリンゴの木を見たときに思い出しました。85年前に植えたリンゴの木はかつてユダヤ避難民がビザを貰いに領事館に集まっていたときにもあったのです。そして今もじっとそこにたたずんでいます。

7．2139人の杉原リスト

スギハラリストについて説明します。日本政府に３回ビザ発給の請訓電報を送ったもののビザ発給拒否の命令を祖父は受けました。２日２晩悩んだ末、家族と相談し「それでも私たちはビザを発給しよう」という決断に至ります。7月18日に大勢のユダヤ人が押しかけ、発給を開始したのが7月29日と祖父の手記に書いています。外交史料館保存のリストを元に解説いたします。

リストには、発給した初日は7月9日に1人から始まっています。次は7月15日と16日に1人、19日に2人。24日と25日に4人、26日に15人、27日からは35人、29日は１２５人と急激に増えています。

大量のビザを発給するには本国からの許可が必要だったため、先に来ていたユダヤ避難民から少しずつビザは発給されていたのです。

わずか10日で祖父はビザ発給の決断をし、29日からはとにかく1人でも多くの人を救うために寝る間も惜しんで働きました。

祖父は毎日ビザを３００枚発給する覚悟で行ったのです。

実際の総数は本人のインタビューに

よれば３５００枚から４５００枚とのこと。リストは２１３９枚が残っています。

多くのユダヤ人が「千畝は私たちと何の関係もないのにドアを開けてくれた。命を助けてくれたことに心から感謝している」と涙を流しながら言います。

祖父は命令に従わずビザを発給し、晩年は「人として当たり前のことをしただけ」と話していました。

祖父は生前「殺される運命にある人たちを今助けなければ私は神に背く」とも話していました。そしてある出来事もありました。

ビザ発給を悩んでいるときに門のところに1人のおばあさんが千畝の前に歩み寄って来ました。その人は千畝の前にひざまずき屈んで靴にキスをして祈るような仕草で「私の命をお助けください」と話しました。千畝はそのおばあさんを見て「この人たちを助けざるを得ない」と心から思ったのです。

8．千畝の言葉

千畝は生前このような言葉をインタビューで残しています。

「私のしたことは外交官としては間違ったことかもしれない、しかし私には彼らを見殺しにすることはできなかった。大したことをしたわけじゃない、人として当たり前のことをしただけです」

9．ポーランド

リトアニアに続き私はポーランドを訪れました。私にはポーランドは初めて訪れる場所で悲惨な歴史をたどった国のイメージが強くありましたが、ワルシャワとクラクフの街は実に美しく、人が優しい国でした。

10．ワルシャワのサバイバー

ワルシャワである人を訪ねました。エルジビエタ・フィツオスカさんといって童話作家、現在82歳の方です。彼女はユダヤ人のルーツを持つポーランド人で、両親の顔を知らずに育ちました。両親はユダヤ人狩りに遭い、父親がナチス・ドイツに抵抗したためその場で射殺、母親はゲットーに収容されエルジビエタさんを収容所で出産しました。母親は軍服を作る縫製の仕事の労働をさせられました。朝ゲットーを出て縫製工場に行き1日仕事に従事。生まれたばかりのエルジビエタさんに睡眠薬を飲ませリュックに入れて密かに連れて来ていたのです。ある日いつものように眠らせて母親は赤ちゃんをリュックに入れていました。兵隊が来て荷物検査を始めました。切っ先の鋭い銃剣で荷物を一つひとつ突き中身を確認しました。赤ちゃんの入ったリュックも銃剣で突かれエルジビエタさんの頬をかすめました。母親は赤ちゃんが見つかって殺されてしまうことを恐れ、ポーランド人による乳幼児を救済する委員会に頼み密かに連れ出すことにしました。小さな木箱に睡眠薬で眠らせた子どもを入れ、上に資材を積んで荷車でゲットーから運び出しました。こうしてエルジビエタさんは命を助けられポーランド人の子どもとして育てられました。同じように里子に出された子どもたちは全員ポーラン

ド人の実子として育てられたのです。17歳までエルジビエタさんは育ての親を実母と信じていたそうです。ある日学校で親友が彼女の本当の素性を伝えたことから自分がユダヤ人であることを知りました。学校の先生がエルジビエタさんの母親から聞いた話を生徒にしたことがわかり、彼女は大変なショックを受けたと言います。18歳のときに家出をしましたが、1年で家に戻り大学も卒業しました。自分がユダヤ人であること、ユダヤ人とは何かも知らずただショックを受けたと私に話してくれました。彼女は母親の顔を知りません。ただ一つゲットーから運び出されたとき、赤ちゃんの横に銀のスプーンが置かれていてそこに「エルジビエタ」と名前が彫ってあったことから名前だけはわかったのです。助けられた多くの子どもたちはそのような形見はほぼなく、彼女のように銀のスプーンを持って助かった例はかなり珍しいと聞きました。そのため、実子として育てられたユダヤ人の子どもたちは本当の素性を知らされないまま大人になっている子どももいます。何より戦時中にユダヤ人を匿っていることがわかれば全員捕まって処刑されたため里親は実子として育てたのです。

私はその話にとても感動しました。スプーンも見せていただき実母と育ての親の両方の愛情を感じました。今彼女が生きているのは育ての親の愛情があるからだと話していました。

ＮＨＫ取材班が彼女に現在のイスラエルとガザについてどう思うかと質問をしました。答えは次の通りです。

「人間は誰のことも殺してはいけないのです。殺すことに正しい理由などありません。イスラエル側もハマスの側にもです。ガザの子どもたちが殺されているのに心が痛みます」

私も彼女の意見に心から賛同します。人はその場所を選んで生まれることはできない、子どもに罪はない、エルジビエタさんの言葉に真実があると思いました。人を殺すことに正当な理由などないのです。

11. ワルシャワにあるゲットー

私はゲットーのあった場所を訪ねました。エンクレーブゲットーといいまして１９４０年11月にできたものです。ポーランドにはゲットーが６００か所あったのだそうです。千畝のところにビザを貰いに来た１９４０年にはゲットーが存在しました。ユダヤ人狩りやゲットーに収容されることを恐れて逃れた人たちがカウナスの領事館に行きました。

12. アウシュビッツ・ビルケナウ

今回アウシュビッツ・ビルケナウ第二収容所を見学しました。ポーランド訪問でいちばん重く感じた場所です。「死の門」と呼ばれる門をくぐると「ランプ」という名前のプラットホームがあります。全長が大変長く、ＪＲの一般的なホームの2倍の長さくらいありました。そこに人間が家畜用の貨物列車に乗せられて運ばれてきて、ホームに降りると選別をされました。ナチス・ドイツの軍服を着た医師数名がホームの中心に立ち、左右に人間を分けました。ガス室に近い方には老

アウシュビッツ・ビルケナウ

人、女性、子どもを並ばせすぐにガス室に送りました。反対側には「強制労働」や「人体実験の対象」にかなう人間を残して生かしました。そしてここに入ったら最後もう二度と生きて戻ることができなかったのです。死を免れたユダヤ人は腕に番号の入れ墨をされ、そのときからすべて番号で呼ばれました。食事の配給も番号で呼ばれたのです。食事内容をガイドから聞いて驚きました。朝食はコーヒーという名前の黒い水５００ミリリットル、昼食は腐った野菜の入ったスープ、夜は朝食と同じコーヒーと固い一片のパンとたまに２グラムのマーガリン。これが彼らの食事すべてでした。

連れて来られた人たちが持っていたカバンは後で別のところに移動するので一時的に預かるとの名目で名前を書かせてプラットホームに置かれました。カバンは「カナダ」という名前の倉庫に保管され、中の金目のものは本国のドイツにすべて送られました。なぜ倉庫を「カナダ」と呼ぶのかとガイドに聞いたところ「カナダはユダヤ人にとって憧れでいちばん移住したい国だったので、それを皮肉り「カナダ」と名付けたのだ」と説明を受けました。

ポーランド人ガイドに案内されガス室跡を見学しました。ナチス・ドイツが収容所を捨てて逃げるときにここのガス室は爆破されたため、地下が潰れたままになっています。ガス室跡の面積はかなり広くここに１日最大で６０００～９０００人近くが殺されたそうです。ただし正確な人数は不明、殺された人の名前も不明です。貨物列車から降ろされた無用な人間はすぐガス室に送られたため記録がないのです。私がお会いした杉原サバイバーご遺族には間違いなくホロコーストで亡くなったご家族がいます。亡くなった場所は皆さんわからないと話します。あの時代、祖父が助けた命はごくわずかでしたが、奇跡的に助かった人たちが今も私たち家族に会いに日本に来る理由がわかる気がしました。もしも祖父がビザを書かなかったら私が訪れた場所で本当に命を落としていたかもしれないのです。「あのとき、何も関係のない千畝さんが私たちにドアを開けてくれた。もしもドアを開けてくれなければ私たちはここには存在していない」という言葉を思い出しながらガス室の周辺を歩きました。跡地には小さな丸い石がたくさん置かれていました。多くのユダヤ人がここを訪れているのがわかりました。お墓参りをするときにユダヤ人は石を置いていくのです。私もそこに同じように石を置いて祈りました。

ガイドに一つのバラックを案内して貰いました。14～15歳の少女たちを収

容したバラックでした。中に入ると非常に暗く一瞬目の前が見えないほどでした。数分で目が慣れて中を見ると粗末な棚があります。3段に仕切られ木が渡してあります。そこをベッドにして少女たちは共同で寝起きしていました。明かりといえば窓から差す陽の光だけ。窓も棚の一つ置きにしかなく室内は薄暗くジメジメしています。窓側で寝起きしていた少女たちは真冬の寒さに凍えたと言います。隙間風が窓から入り、マイナス20度近くになるポーランドの冬に毛布1枚を4〜5人で分け合って寝ていたというのです。また囚人服は支給された1枚のみ。着替えることはありませんでした。そしていちばん衝撃を受けたのは、その少女たちはトイレに行くことにも制約があり、２００人近い子どもたちはわずか10分でトイレを済ませるようにと命令されていたとのことです。当然短い時間で全員がトイレを済ませられなかったとガイドが話したので、トイレを使えなかった少女たちはどうしたのかと質問したら「垂れ流した。いちばん彼女たちを悩ませたのは不衛生な食べ物を与えられたため常に下痢をしていたこと。もちろんトイレにはトイレットペーパーなどない」との回答でした。それを想像するだけで私はどうかなりそうな気持ちになりました。そんな劣悪な環境に罪もない子どもたちがなぜいなくてはいけなかったのか、怒りと悲しみでただ涙を流すしかありませんでした。

バラックの入り口に2枚の壁画がありました。作者不明で収容所の大人が書いたものとのことでしたが、絵は子どもたちが楽しそうに遊んでいるところと学校に行くところを描いたものでした。少しでも楽しかったときの想い出を胸に希望を捨てないでと訴えているような絵で、生きることの過酷さから子どもを救いたい大人たちの気持ちが伝わってくるようでした。

トイレに続いて洗面用バラックにも案内されました。長い洗面台の上にパイプを渡し蛇口が取り付けられた跡がありました。井戸水をくみ上げて配水していたため夏は頻繁に井戸水が枯れて出ないことがありました。代わりの水などなく、枯れたらそれで終わりだと聞き、人間として最低の環境も与えられない劣悪な環境に絶句しました。

13．アウシュビッツ

ビルケナウを出てアウシュビッツ収容所を見学しました。門の入り口には「ARBEIT MACHT FREI」と文字が掲げられています。「働けば自由になれる」という意味ですが自由になることはなかったのです。1人脱走すれば見せしめに10人が絞首刑となり、死刑場所は囚人が歩く通りに置かれ、遺体は数日そのまま放置されました。また脱走するには高圧電流が通った有刺鉄線を越える必要がありましたが、場所によっては有刺鉄線が2重に張り巡らされているところもありました。鉄線の下を掘って脱獄することもナチス・ドイツは想定し、地下1メートルをコンクリートで固めていました。また有刺鉄線の前にはドクロマークの看板があり、これを越えれば射殺すると書いてありました。

何よりも見学してショックだったのは大量の髪とカバン、靴、メガネでした。それが大きなガラスの向こうに展示されて虐殺された人たちの声が聞こえるようでした。靴の展示では手前に小さな赤い靴がポツンと置かれていました。その小さな少女はここに来るために生まれたのではない、戦争の無意味さをその靴は訴えているように感じました。

14．ガス室

復元されたガス室を案内されました。見学の日も大勢の人が入り口に列を作っていました。ガイドから会話せず静かに入ってくださいと説明を受けました。手には石と私が作った花束を持って入りました。入り口を入ると左手すぐに薄暗いガス室があり、上を見上げると明かり取りの小窓のようなものが見えました。そこからチクロンBのガス缶が投げ込まれ15～20分で人々は苦しみながら窒息死したのです。狭い一室にたくさんの人が押し込められ猛毒を投下されて苦しみながら死んでいった惨状を思い浮かべました。隣の部屋に行くと火葬場があり焼却炉が復元されていました。敗戦当時、ナチス・ドイツはすべてのものを破壊して逃亡したためここの火葬場も同様に壊されました。博物館として再建した際、アウシュビッツ側のガス室は復元され、焼却炉も一つひとつ破壊されたパーツを拾い集めて復元したそうです。私は今回特別に焼却炉のところまで入れていただき、焼却台の上に花束と石を置かせていただきました。手を合わせ失った命の重さを思いながら祈りました。

15．ホロコースト

ホロコーストでは約６００万人のユダヤ人が亡くなりました。その３分の１は子どもたちと言われています。そしてアウシュビッツ・ビルケナウの絶滅収容所では約１１０万人がガス室で絶滅しています。占領下のポーランドにはナチス・ドイツによって約６００のゲットーが建設されました。アインザッツコマンドによる大量殺戮は１９４１年に始まり、絶滅収容所は１９４２年以降に６か所に存在しました。

16．多くの犠牲の上に考えること

あの時代最も悲惨な場所に私は今回チャンスをいただいて行ってくることができました。祖父の奇跡的な話は何度も多くの人の前で語り、資料がなくても話せるくらいになっていますが、反面その背景にはどんなものがあったのかといつも思っていました。

祖父の講演をすると大概人に言われることがあります。アウシュビッツには行ったことがあるのかと。私はたくさんのユダヤ人と交流があり、ホロコースト記念博物館はイスラエルのヤド・ヴァシェム、アメリカの国立ホロコースト記念博物館をはじめ合計10か所訪れています。多くの資料を目にし、彼らの悲しい過去や差別の歴史について学んできました。

彼らの家族のほとんどがアウシュビッツなどで命を落としていますが、実際はどこで殺害されたのかわからないと語ります。第２次世界大戦では多

くの人が犠牲になりました。

アウシュビッツでは高齢者、そして女性と子どもが真っ先にガス室に送られ殺害されました。

当時の状況下で、ユダヤ人を助けることがどれほど危険で非常識にも思える行動だったのかと恐怖も覚えます。

命を助けることが難しい時代に権力に流されず、差別される人や弱者に寄り添い「当たり前のことをしただけ」と平然と言う祖父の心の強さと勇気にあらためて尊敬の念を覚えます。祖父の助けた命が今では20万人になっていると言われています。

海外では多くのユダヤ人が祖父のことをこのように言い表します。「One person can make a difference」、つまり「一人の人でも世界を変える力がある」という意味です。私は祖父のような人が今もこの時代に求められているのではと思います。たった一人でも立ち上がる人がいればきっと世界は変わるのだと。

今回ヨーロッパを訪ねて、祖父が「自分の命をかけてまで救いたい」と思い、寝食を忘れるほど懸命に書いたビザの意味がやっとわかった気がしました。ホロコーストでは約６００万人のユダヤ人が殺されたという現実に触れ、私たちは彼らの死を無駄にしてはいけないと思いました。

そして今、私たちは日々かつてのような戦いの場面をテレビ、新聞などで目にしています。今起きているのはイスラエルとガザ地区での戦いやウクライナとロシアの戦争ですが、多くの犠牲となっているのはやはり年を取った人、そして女性と子どもたちです。彼らには何の罪もないのです。悲劇を繰り返してはいけない。

かつてたった一人でも立ち上がり「どんな民族でも私は助ける」と話した勇気ある外交官がいたことを忘れないでください。千畝が「人として当然のこと」と勇気を持って決断したのは、それが真の人間の姿だから。だからこそ「命のビザ」を書き続けたのでしょう。

そしてこの一人の外交官の話を皆さんも語り継いでほしいと思います。何でもいいのです。ＳＮＳでもインスタでも、私たちが思うこと、できることをすればきっとまた世界はよくなっていくと思うのです。祖父が望んだ平和な世界を皆さんに巻き起こしていただければ嬉しいです。

（２０２４年９月26日・公開講演会）

筆者略歴（すぎはら・まどか）

神奈川県藤沢市生まれ。杉原千畝の孫。千畝・幸子の長男弘樹の長女にあたる。

清泉女子大学卒業後、大手保険会社を経て２０１２年からの特定非営利活動法人杉原千畝命のビザの副理事長に、２０２３年５月より理事長に就任。現在は千畝の偉業を広める活動に専念、国内を中心にパネル展、講演会などを行っている。